

# 吉原遺跡、松原経塚発掘調査 現地説明会資料

令和4年（2022）12月17日（土）  
（公財）和歌山県文化財センター

## 1. 遺跡の概要

吉原遺跡は日高川河口右岸に形成された砂丘上に立地する弥生時代から江戸時代にかけての墓地で、既往の調査では、弥生時代から古墳時代初頭にかけての方形周溝墓や土壙墓、古墳時代の土壙墓、古代から近世にかけての火葬墓などが検出されています。

今回の発掘調査は、県道の安全施設整備事業に伴うもので、11月半ばから面積約370㎡を対象として実施しています。調査では、弥生時代中期から古墳時代初頭にかけての方形周溝墓を5基、奈良時代の火葬墓などを検出しました。

004方形周溝墓は、墳丘部が一辺6.2mで、周溝は幅1.2～1.6m、深さ0.15～0.35mです。埋土には10～20cmの礫が多く含まれます。遺物は弥生時代中期中頃の土器が出土し、県内の方形周溝墓のなかでは古い部類に位置づけられます。

011方形周溝墓は、10～20cmの礫が密集する溝が直角に交差することが予想されることから、方形周溝墓と判断しました。規模は不明ですが、遺物は弥生土器の細片が出土しています。

015方形周溝墓は、墳丘部が一辺8.9mで、周溝は幅1.2～1.7m、深さ約0.30mあります。調査区が狭小なため、西側を中心に約1/3を検出したこととなります。西辺の中央には陸橋部が存在したことが、礫の検出状況から窺うことができます。周溝内からは10～20cmの礫が多量に出土しており、これらの礫は基本的に墳丘側から落ち込んだ状態となっています。また、墳丘裾に沿うように列石も確認でき、旧状としては墳丘裾に列石を持ち、墳丘部に葺石（貼石）などの構造物があった可能性があります。遺物は検出時あるいは周溝内から、弥生時代終わり頃の土器片が出土しています。



019火葬墓（南から）

008方形周溝墓は、浅い落ち込み状遺構と認識して掘り下げましたが、礫が並ぶ状態から2基の方形周溝墓が重複していると判断しました。遺物は弥生時代終り頃の土器が出土しています。

019火葬墓は、縦横0.25m、深さ0.2mの小石室に須恵器の鉢・蓋を納めたもので、鉢内に骨灰を充填していました。

## 2. 遺跡・遺構の評価

礫が密集して出土する008・011・015方形周溝墓は礫を用いた構造物を有した可能性が高いと言えます。とりわけ、015方形周溝墓は残存状況が良好で、構築当初の姿が窺えるものです。県内では、礫を用いた列石や葺石（貼石）などの構造物をもつ方形周溝墓は確認されていません。方形貼石墓が分布する近畿北部や山陰地方との関連も注目され、当地域の墓制や地域間交流を考えるうえで貴重な発見と言えます。



004・011方形周溝墓（上空から）



008方形周溝墓（上空から）



015方形周溝墓（上空から）



015方形周溝墓（北から）

